人 格 524

青春期の充実感と学生生活との関係

大野 久
（新潟青陵女子短期大学）

問題：これまでに青春期の充実感に関する一連の研究で、生活感情である充実感と、その年齢の特性を主体に形成される形における関係の模索が試みられてきた（大野，1984a，1984b，1987）。そこで、本研究では、生活感情の特性を考慮した上で、現代の特性を主体に形成される形における関係の模索が試みられている。果たして、これらの結果が、従来の結果とアイデンティティ理論による理系的な考察と同様に、生活空間の特性をよく反映していることを目的とする。

方法：①質問紙：現代の学生の特性を把握するための作成として、「大学生活・講義」、「クラブ・サークル・ポランティア」、「友人関係」、「恋愛」、「アルバイト」、「趣味」、「家族」、「その他・生活伝統の領域」を問う。「将来」に関する領域を設定した。それぞれの領域に関して5~10項目の質問項目を作成した。選定は、「非常にあってはまる」（5点）から「全くあってはまらない」（1点）までの7段階評定である。

また、充実感の判定に関わっては、大野（1984）の充実感尺度を使用した。この尺度は、生活感情の側面である「充実感分・退廃・空虚感」、アイデンティティの特性を模索する「自立・自信・他者自尊」、実践による「退廃・孤立、他者譲りに関する（信頼・（時間的展望）・不信・（時間的展望の拡散）」の4尺度によって構成され、各尺度はそれぞれ5項目の質問項目がある。評定は上述した質問紙と同様の7段階評定である。

②調査の実施：被調査者は、新潟市内の国立大学、教養部の1・2年生男子120名、女子120名の計240名である。調査は1988年10月上旬に講義時間内に集団実施された。

結果と考察：①全体的傾向：全体をとりあげた充実感と生活感情の関係が高かった項目は、1）「今に学校を満足している」（大学生活、rs=.52）、2）「夢や希望にかかって現在努力している」（将来、rs=.49）、4）「履歴書の趣味の欄に自信をもって書けるものがある」（趣味、rs=.37）いずれもP<.001などである。領域別では、将来、趣味に関する項目で相関の高い項目が多く出た。

②大学生活・講義」と充実感：自身の所属する大学について、講義・演習に意味を感じ、積極的に参加している学生は充実感高分と自信感が高い。

③「クラブ・サークル・ポランティア」と充実感：一般的にクラブ、サークルに参加しているほど、充実感高分が高まる。また、12）「クラブ、サークル活動の中で自分自身が生かされている」を設定した群の充実感高分の4尺度全ての得点が、否定した群の得点よりも有意に高かった（P<.01）。しかし、「クラブ・サークルに参加しながら、7）「私は目的を持って行動している」などを否定した群とクラブ・サークルに参加していない学生の充実感高分の得点を比較してみると、いずれの項目の場合でも、充実感高分の4尺度全てに有意差はない。また、クラブ・サークルに参加せずに13）「クラブ、サークル、ポランティアのほかに能中できるものがある」を設定した群と、なんらかの形でクラブ・サークルに参加している学生の得点を比較すると、充実感高分、退廃、他者との関係は、自立、自信では、この項目を肯定した群の得点有意に高い。

したがって、クラブ・サークルに関しては、クラブ・サークルに参加しているか否かという所属の問題よりも、自分が退廃できる、役立てるものが何か否かが充実感に関して重要であると考えられる。

④「友人関係」と充実感：友人が多いことは充実感に結び付いているが、満足度が高い人は充実感と関連しない。また、親友の存在は退廃と信頼に、男性の友人の存在は退廃、信頼、親友の関係の広さ、自信による関係が深い。

⑤「恋愛」と充実感：一般的に学生生活において、学生は「恋がいれば充実する」と予想する傾向があるが、今回のデータには、こうした傾向はない。

⑥「趣味」と充実感：趣味を持つことは、充実感と生活感情の関係が強まる。それに反して、自立・自信、信頼に関連が深い。

⑦「将来」と充実感：将来に関する希望や時間的展望を持つことは、また、それが地域の努力目標になるほど具体化されていることは、青少年期の充実感に密接に関連している。